

---

# バレンタインとிரらない告白

栗栖 春都

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バレンタインと知らない告白

### 【コード】

N9299Q

### 【作者名】

栗栖 春都

### 【あらすじ】

同級生にチヨコレートを要求されたんで、まあ、あげてもいいかなと思った。

予防線を張り巡らせる。

核心にたどり着かないように、それはもう無数に。

たてよこたてよこなめなめなめなめ。

フェイクもちよつと織り交ぜつっ。

「あーあー、誰かチョコくれねーかなー」

だって、気付かれたくない。

わかられちゃったら、おしまいだ。

「部活の後輩がくれるんじゃないの？」

「毎年女子全員からってことでもらうけどさ。それじゃ味気ないじゃない」

「贅沢言っな」

「誰か頼真っ赤に染めて先輩好きですっ！ って来ないかな」

「夢見すぎ」

「夢見たっていいじゃない、バレンタインだもの」

「大体あんた別にチョコ好きじゃないじゃん」

「めちやくちゃ好きってわけじゃないけど、嫌いじゃないよ」

「あれ？ 甘いもの苦手とか言ってたっけ？ 前に」

「前っていつの話だ。高校上がってからはよく甘いもんつまんでる。調理実習のクッキーも全部自分で食べたしな」

「へえ。そっか、いらないうって言ったの中学の時か」

「そっぴやそんな時期もあったな」

「せっかく中学の時テニス部でモテたのに全部断ってたよね、チョコレート」

「んー。食いきれないし、めんどくさいし」

「もったいないの」

「はははっ」

「クールぶるならキャラ持続させなさいよ、今さらチョコ欲しいと

か

「いいの。俺は高校入って変わったの」

「ほんつと、ありえない変わりようというか、逆高校デビューしたよねえ」

茶色くしていた髪を、そのまま刈って坊主にし、制服は第一ボタンまでしっかりとめるようになり、冬場もカーディガンではなくセーターを着るようになった。

しかも入った部活が書道部である。

同じ中学から入ったやつで、同姓同名の別人だと勘違いしていたのもいるらしい。

「こつちの方が楽しいから、いいんだよ」

「そ」

空を見上げる。

「でもおかげで女の子の人気はなくなっただけどね」

「それを言ってくれるな」

冬の空はきれいなオレンジ色。

「お前は中学から変わらないよな、全然」

「変わる必要がなかったしね」

変わるうとも、思わなかった。そこまで自分であることに不自由してない。

「あのさあ、チヨコくれよ、進藤」

「そんな欲しいの？」

「欲しい」

一つ、大きく息を吐く。

「しゃーないなあ、ついでに作ってやるか」

「まじで？ よっしゃあ、これで最低一つゲットっ」

ガッツポーズを作る。

嬉しそうに、にこにここと笑う。

「ちゃんとお返しちょうだいよ」

「おう」

「はいはい」

部活のない日、たまの一緒の帰り道、他愛のない会話。

昇降口から分岐点まで十五分の楽しい時間もあっという間に終わってしまう。

来週頭はバレンタインデー。

「えー、先輩に告白するのっ?」

「ちよっ、声大きい、ゆき、言っちゃだめだつてばっ」

バレンタイン当日、放課後。

書道室の前の廊下で、書道道具を持った女子二人がきゃっきゃうふふとはしゃいでいる。

多分、あいつの後輩。いかにも書道部そうな、大人しそうで見分けのつきづらい二人組だ。そして先輩つつのが、あいつ。なんとなくだけれど、書道部は男子が少ないし、あいつ意外と後輩受けするし、多分そう。

そして私はここに何をしているかと言えば友チヨコ（厳密にはチヨコではなくチヨコブラウニーだけ）を配り終えたので最後の一つを処理するためにわざわざ四階の最奥までやって来ていたのである。

しかし二人の会話をきいて、確信する。

「がんばってね、私もついてるからっ」

しまった、

まずい、これは、非常にまずい。状況的にどう考えてもよろしくない。

だってこれもしかしてこの後輩ちゃん部活が始まる前に告白しようとしていませんか。

馬鹿じゃないんですか。

いやほんと告白とかメールでして欲しい。なんでここで特攻かけようとするんだ、よくそんな度胸あるな、一年生だからか? それ

ともただの考えなしなのか？

ともかく私が居合わせてはいけない。いくらなんでも気まずい。まずった、まさかあいつのこと好きなやつがいるなんて思わなかったから。

仕方ない、ここは退散してあいつの下駄箱にブラウニー放り込んで帰るか、なんか嫌な感じだけど仕方ないだろうと。

そこで最悪のタイミングであいつ登場。

「お、進藤チヨコ持ってきてくれたんだ、さんきゅー」

来てしまったものはしょうがない。

「ありがたく食べなさいよ」

「ありがたくいただくよ」

「んじゃ」

そそくさと立ち去ろうとした。

が、しかして嫌な予感に背後から捕まる。

「せつ、先輩つてそちらの方が好きなんですかっ?!」

上ずった声で片方がそう叫んだ。

先輩 あいつ、そちらの人 私、だろっなははははは。

つたく最悪なことをしてくれたな、後輩。

隠しきれない不機嫌が顔に出してしまう。

あいつは突然の質問に面喰っている。

後輩ちゃんは、言った瞬間に間違いに気が付いたようでしたといった表情だ。

隣の友達は目が泳いでいる。対処のしようがないもんね。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

四人分の沈黙。

「えーと、まあそのなんだ！」

場に似つかわしくない声をわざとあげるあいつ。

結論は、いかに。

「好きだ！」

後輩の方を向いたまま、言い切った。

まじかよ。

「なんで染めちゃったの？ 似合わないとは言わないけど、黒髪のほうがかっこよかったのに」

「じゃあ、甘いもの苦手だからって断ればいいじゃん。実際そんなんだし」

「あんたの字、好きだな。技術がどうこうじゃなくて、なんかくるものがあるっていうか。意外とそういう才能あるんじゃないかなあ」

「いいよー、途中まで一緒に帰ろう」

私が言ったこと。

はは。

わかってたけどね。

気付かせたくなかった。

あんたが私のことが好きだってことを知ってる、ってことをあんなに気付かせたくなかった。

とつくのとうにわかってたよ、ばればれだよ、んなもん。

好きなんですよ？

好きなんだよね？

だから気付いてないふりしてたのに、  
どうして言わせちゃうかなあ！  
なんで言っちゃうかなあ！  
馬鹿やるー。

「あ、進藤」

翌日の一限前、偶然に廊下ではち合わせた。

気まづくなつて無視したりとか、そういうことをする間柄ではな  
い。

些細なことでは崩れない、仲のいい昔馴染みである。

「あ、おはよう」

「おはよう。あの、昨日のことなんだけどさ」

「あー、わあってるわあってる、あれで好きだって言わなかったら  
コクられちゃうもんね。まあ私どうせ彼氏作るつもりないし、そう  
いうことにしておいてもいいよ」

「あー……うん、すまん  
ぶっ。

これで一安心かな。

「そのうちパフェでもおごつてよ。駅の近くにおいしいところあんの。  
プリンパフェ食べたい」

「パフェってお前、ちよつと高くねーか？ まあいいや、じゃあ今  
週の土曜にでも行くか」

「うん」

「そんなとき、返事きかせてもらうからな」

「うん、わか……」

何も考えずに相槌を打つところだった。

「はあっ!?!?」

「じゃー土曜の十一時に駅で」

じゃっ、とすたすたと自分の教室に戻る。言い逃げかよ。

授業開始五分前のチャイムが鳴り渡る。

さあ、どうしようか。

とりあえず、土曜日は奥の方で眠ってるヒール靴でも履いて行ってみようと思った。

(後書き)

おなががすいたので書きました。だれかチョコレートください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9299q/>

---

バレンタインとிரらない告白

2011年2月14日22時41分発行